

聽器組織標本検査中偶然に発見したる 聽神經腫瘍の2例

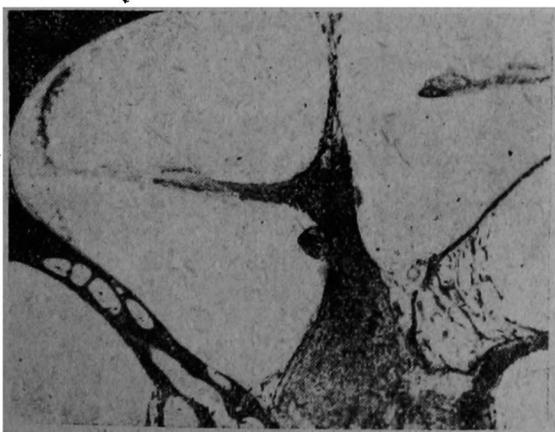
醫學士 福 武 豊 次
醫學士 水 ・ 河 忠 敬

岡山醫科大學耳鼻咽喉科教室（主任 高原滋夫教授）

余等は人體聽器の組織標本検査中、偶然蝸牛殻内神経末梢部に局限して存在せる腫瘍の1例並に内聽道内前庭神経部に存し、生前何等臨床症状を示さなかつた聽神經腫瘍の1例を発見したので報告し、文献の一資料としたい。

第1例 結核性腹膜炎にて死亡したる33歳の男子。腫瘍は右側蝸牛殻第2廻轉に於て蝸牛骨軸に接し、鼓室階中に現はれたる球状の小腫瘍である。組織所見は「エオジン・ヘマトキシリン」染色にては表面は1層の扁平上皮にて覆はれ、内部は多數の橢圓形乃至圓形の核を有する細胞並に微細なる纖維よりなる。此等細胞核は「クロマチン」中等量細粒状に現はれ、原形質は境界不鮮明にして一部纖維な

第1圖（第1例）



る纖維に移行せる像を認める。尙ほ所々に纖維の横断面と思はれる中心稍々透明なる小管状體多數に存在す。蝸牛骨軸に接したる部分の纖維はローゼンタール氏管内の纖維と骨壁内間隙を通じて連絡せるを認む。腫瘍に接したるローゼンタール氏管内には鼓室階骨壁に接し、此の部に基底を有する半圓形の他の部

分に比し「エオジン」に稍々濃染したる部分がある。此の部は稍々細胞に富み、此の部の細胞は細長き「クロマチン」含有量多き核を有し、原形質は境界不鮮明にして漸次纖維なる纖維に移行せるを認む。而して此等纖維は他の部分の神經纖維に比し稍々太い。「オスミウム」酸二次染色により髓鞘染色を行ふに、腫瘍内纖維並に此部の纖維は青色に染色さる。腫瘍附近の神經纖維、神經節細胞には變化なく、他の迷路内組織は全く異常を認めない。

第2例 腦炎にて死亡したる64歳の女。腫瘍は内聽道内前庭神経の部分、即ち上前庭神經節細胞と下前庭神經節細胞との間にあり。

第2圖（第2例）



腫瘍の大きさは約280 μ 。腫瘍の組織所見は紡錘形或は橢圓形の細粒状「クロマチン」を中等量に含有する核を有し、原形質は境界不鮮明にして微細なる纖維よりなる細長き細胞並に此等細胞より分化せる纖維束よりなる。此等細胞は所々に密集して束をなし、又不規則なる

渦状をなしてゐる。ヴァンギーソン氏染色にては繊維は黄色に染色され、定型的の「ノイリノーム」の所見である。前庭内末梢部組織には變化を認めない。

扱て聴神経は他の脳神経に比し腫瘍の發生を見る事多く、所謂聴神経腫瘍として従来より多數の報告を見る所である。然し乍ら余等の第1例の如く迷路内に限局して認められたる報告例は極めて稀にして、O. Mayer, Nagel, Schwartz, Schwabach, Lange の報告を見るのみである。即ち O. Mayer の例はレツクリングハウゼン氏病患者に於て兩側迷路、即ち蝸牛殻並に前庭に於て全く左右對稱の位置に多發性に認められた。組織所見はレツクリングハウゼン氏の所謂神経纖維腫と認められるものであると記載してゐる。Nagel の例は聾患者の剖検中に認められたるものであつて、基礎廻轉上半部の螺旋神経節の部分より發生し、骨螺旋盤内を充たし、一部は余の第1例の如く鼓室腔中に球状をなして突出して居る。組織的にはレツクリングハウゼン氏の神経纖維腫と認む可きものであつたと記載して居る。

Schwabach, Schwartz の例は腦膜炎性迷路炎患者で、骨竝に結締組織を以て充たされたる前庭内に認められたるものである。Lange の例は迷路炎を経過したる者の前庭竝に内聽道内に認められたるもので、何れの例も組織的には炎症により變性した神経纖維の再生により生じたる切斷神経腫と認められるものであると記載してゐる。余等の例は O.

Mayer の例と異なり、全く單獨に發生せるもので全身的にもレツクリングハウゼン氏病の所見なく、又他の諸例と異なり迷路内竝に腫瘍周圍組織には全く炎症所見は認められなかつた。本例は果して眞正腫瘍と言ひ得るや否や疑問なるも、組織所見に於て多數の髓鞘を有する神経纖維竝にシュワン氏細胞と思はれる細胞を有する所よりして腫瘍とすれば神経腫と謂ふ可きものならん。

第2例は前述の組織所見より所謂「ノイリノーム」と呼ばれてゐるものに一致する。本例の如く全く生前何等の臨床症狀なくして内聽道内に腫瘍を認めたる症例は、Crowe が250例の聴器標本検査中6例認めたと報告してゐる。即ち中4例は本例と全く同様の場所に認められたる「イノリノーム」である。他の2例は蝸牛殻神経に於て認められたるものにして、1例は「ノイリノーム」、1例は Angiomatöse Geschwülst と記載してゐる。従来聴神経腫瘍の發生部位に就ては色々の疑問があり、又實際手術或は剖検により得たる材料に於ては既に進行せるが故に原發部位を確める事が出来ない事が多い。然し Henschen, Cushing 等の如く、恐らくは前庭神経より發するものならんと考へてゐる學者が多い。Crowe の例及び本例は聴神経腫瘍の發生部位に對する一研究資料となるものと言へよう。

拙筆に臨み御懇篤なる御指導を賜りたる小田前教授、御校閱を賜りたる高原教授竝に組織的所見に就き御教示を賜りたる病理學教室濱崎教授に深謝す。

文 献

1) Crowe, Mary and Hardy, Arch. Surg., Bd. 32 (1936). 2) Lange, Beitr. z. Anat. etc. d. Ohr., Bd. 1. 3) Nagel, Zeitschr. f. O., Bd. 75 (1917). 4) O. Mayer, Zeitschr.

f. O., Bd. 75 (1917). 5) Schwabach, Zeitschr. f. O., Bd. 48. 6) Schwartz, Arch. f. O., Bd. 5.